

庄内見学会—鶴岡と酒田を巡る二日間

土井 良浩 弘前大学

1. はじめに

9月2、3日、東北支部では庄内地域の中心都市、鶴岡市・酒田市で見学会を実施した。大学院生4名を加えた17名の参加があった。初日は正午過ぎに鶴岡駅に集合し、夕方まで中心市街地を巡った後に酒田へ移動して駅前施設を見学、夜は老舗料亭「香梅咲」で懇親を深めた。二日目は朝から真夏を思わせる炎天下の中、港湾部や高台を含んだ酒田の街を歩き、正午に現地で解散となった。両市はいずれも「徒歩圏で暮らせる」同心円型の市街構造を基調とし、歴史資源・公共施設群の都心集積や、空き家活用・エリアマネジメント等を通じて中心市街地の再生に取り組んでおり、近世以来の街割り・建築活用から最近の公民連携プロジェクトまで幅広く見学できた。本稿では近年の動きを中心に紹介したい。

2. 鶴岡：商店街周辺部における新たな取り組み

鶴岡では2004年に線引きを実施、合併後2017年の立地適正化計画により居住誘導区域を旧市街中心に据え、高度地区によって駅前35m、主要道路沿い20m、旧武家地10mと高さを制御し景観秩序を担保している。また「文化・学術のまち」の理念の下、国合同庁舎、鶴岡市文化会館、アートフォーラム、藤沢周平記念館、大学、荘内病院等を都心に集積させた“シビック・コア”の形成が特徴的である。

中でも「山王通り商店街」は見所が多い。車道を拡張せず歩道を広げて融雪機能を備え、行燈型の街路照明で町並の歴史的雰囲気演出し、商店街振興組合を中核に20年以上続くナイトバザール等、住民主体の運営が続く。醤油屋をリノベーションして生まれたカフェ「古今 cocon」、友好都市である江戸川区との交流から生まれた「江鶴亭」は元の町家を活かしたものである。通りから少し離れた「まちなかキネマ」は旧絹織物工場を再生した映画館で、市民主体の運営により都心の文化拠点として維持されている。さらに、内川の対岸にある江戸初期の正方形街区を基盤とした「銀座通り商店街」には、地域に開かれた高齢者専用コーポラティブ賃貸住宅「クオレハウス」、県内初期のRC造ビルで登録有形文化財である「旧小池薬局恵比寿屋本店」を衣替えしたカフェ＆バー「ebisuya」があり、街並みに新たな価値を与えている。

3. 酒田：様々な公民連携プロジェクトの展開

北前船の寄港地として栄えた港町、酒田の中心市街地は江戸期以来の街区構成を基本とし、1976年の大火後の復興都市計画に伴う区画整理により大きく改変され、商店街のモール

化や集合住宅・緑道・公園のネットワーク化によって骨格が形成されている。駅前には再開発により交流拠点施設「ミライニ」（図書館・ホテル・住宅・駐車場などの複合）が新たな核として形成され、景観形成重点地域（山居倉庫周辺、日和山周辺）の指定による地域独自の景観保全や相馬楼、小幡楼などの歴史建造物の現代的活用も行われている。

市街地の中心となる中町エリアには、日本一の地主と称された本間家の旧本邸や、近年建替えのあった産業会館や市役所が立地し、屋台村「北前横丁」や中町大屋根整備といった“場づくり”も重ねられてきたが、大規模店舗の閉店により商業機能は衰退しつつある。これに対し山居倉庫エリアでは米倉庫群が国史跡に指定され、山居倉庫の対岸の高校の跡地に定期借地で整備された商業施設「いろは蔵パーク」（良品計画も出店、東北最大）や旧消防署跡地に整備された移住者向けアパート「TOCHITO」など、地元事業者による公民連携事業が展開されている点は注目すべきである。同様に港湾エリアでも倉庫をリノベーションした食事処「SAKATANTO」が新たな観光交流拠点となっている。

4. おわりに

鶴岡・酒田ともに3時間程度、7、8kmの行程を歩いたが、見所が非常に多く都市に必要な中心性や密度が備わっていた。歴史が残した資源を活用しつつ磨き上げると同時に、人口減少時代に対応した新たな公民連携プロジェクトも多数進められており、両市の中心市街地の未来の可能性を感じることができた二日間であった。

終わりに今回の見学会の企画調整に携わっていただいた東北公益文科大学の温井先生に感謝を申し上げます。



鶴岡市文化会館（タクト荘銀）にて